

# 伝三条公敦筆源氏物語断簡考

瀧山 嵐

## 緒言

室町時代の公卿である三条公敦（一四三九—一五〇七）を伝称筆者とする源氏物語断簡（以下、「当該断簡」）が存する。小林強「源氏物語関係古筆切資料集成稿」では、「公敦（転法輪三条）」の「源氏物語切」について、本文は「青表紙本」であるとし、玉鬘卷五葉（後掲、断簡B・E・F・G・I）、ならびに若菜下卷一葉（後掲、断簡K）の計六葉を報告している。<sup>(1)</sup> 稿者は、これら六葉の断簡に加え、新たに五葉の断簡を見出した。五葉のうち一葉は大垣博氏蔵の玉鬘卷断簡（後掲、断簡C）、残り四葉は早稲田大学図書館蔵の断簡である。早稲田大学図書館蔵四葉のうち一葉は、佐佐木忠慧氏旧蔵古筆手鑑「秋蛇蔵」所収の玉鬘卷断簡（後掲、断簡A）である。<sup>(2)</sup> いま一葉は、中野幸一氏旧蔵九曜文庫の若菜下卷断簡（後掲、断簡J）である。<sup>(3)</sup> 残り二葉は、玉鬘卷断簡（後掲、断簡D・H）であり、二〇一九年、早稲田大学図書館に新収される運びとなった。

本稿に集成する当該断簡は、計一一葉の存在を確認しうる。本稿では、新出断簡の紹介に加え、これら一一葉の断簡を集成し、本文と書誌との分析を通して当該断簡の特性に言及する。

尚、本稿の図版は、実際に実物調査を行い、撮影、及び図版掲載のご許可をいただいた断簡のみを掲載している。

### 一 伝三条公敦筆源氏物語断簡集成

当該断簡は、玉鬘巻が九葉、若菜下巻が二葉ある。以下、当該断簡一一葉を集成し、書誌情報、翻刻を掲載する。掲出順序は原則、『源氏物語』の内容の順序に則る。掲出にあたり、掲載元、あるいは所蔵者名を示し、山括弧内に池田亀鑑編著『源氏物語大成 校異篇』の該当箇所頁数・行数を掲出した。翻刻本文は、枠内に示し、行末に行数番号を付した。また、字高については、実際に実物調査を行った断簡（後掲、断簡A・C・D・F・H・J・K）のみ掲出している。

また、翻刻の後に本文の校異を掲出した。簡校にあたり、『源氏物語大成 校異篇』、加藤洋介編『河内本源氏物語 校異集成』、同『源氏物語校異集成（稿）』、『源氏物語別本集成』等を適宜、参照した。<sup>(4)</sup>校異は、仮名や漢字の表記の相違などは原則として除き、特に重要と思しい箇所のみ掲出した。本文の校異については、次節にて詳述するが、当該断簡の大部に相当する玉鬘巻の本文が大局的には日本大学蔵三条西家本の本文に近いという見通しのもと、以下では所謂「青表紙本」系統の中でも、『源氏物語大成』や諸注釈書の底本として広く採用されている大島本をはじめ、三条西家本などを中心に取上げた。ただし、伝明融等筆本（東海大学蔵）は、玉鬘巻を欠くため若菜下巻のみ、また宮内庁書陵部蔵三条西家証本も、玉鬘巻は河内本系統の本文を有するため、若菜下巻のみ参看している。

校異の掲出の際に用いた主要伝本の略号は以下の通り。

・〔断〕…断簡本文

・〔大〕…『源氏物語大成 校異篇』底本Ⅱ大島本（古代学協会・古代学研究所編『大島本源氏物語』第4巻・第6巻、角

川書店、一九九六年）

・〔三〕…日本大学蔵三条西家本（岸上慎二ほか編『日本大学蔵 源氏物語』第四卷・第六卷、八木書店、一九九五年）

・〔明〕…伝明融等筆本（東海大学蔵桃園文庫影印刊行委員会編『東海大学蔵 桃園文庫影印叢書 第二卷 源氏物語（明融本）

Ⅱ』東海大学出版会、一九九〇年）

・〔証〕…宮内庁書陵部蔵三条西家証本（山岸徳平・今井源衛監修『宮内庁書陵部蔵 青表紙本 源氏物語』若菜下、新典社、

一九六九年）

・〔肖〕…肖柏本（天理図書館蔵。池田亀鑑編著『源氏物語大成 卷二 校異篇』、および加藤洋介『源氏物語校異集成（稿）』にて校異を確認）

右の他にも必要に応じて『源氏物語大成 校異篇』所収の諸本の本文を掲出した場合がある。これらの略号は、『源氏物語大成 校異篇』のそれに従う。

### 【玉鬘巻】

断簡A 早稲田大学図書館蔵 古筆手鑑「秋蛇蔵」〔七二四頁・四行目〜六行目／七二六頁・八行目〜九行目〕

縦一五・五糎×横一一・四糎。本文五行書き。字高、平均一二・八糎。一行あたりの文字数、平均一八・五字。ただし、5行目は、直後に和歌があり改行しているため、字高と一行あたりの平均文字数の算出に含めていない。極札表「轉法輪殿公敦公ひきこえけれ（守村・黒方印）。鑑定家、古筆別家三代了仲（二六五六〜一七三六。（図版1）

ひきこえけれをのく我身のよるへとたの

1

まんにいとたのもしき人なり是にあし	2
くせられては此 <sup>ち</sup> かきせかいにはめくらひ	3
いくきはに哥よまゝほしかりければやゝひさ	4
しうおもひめくらして	5

※□…料紙、削れ痕。3行目と4行目との間に継ぎ痕あり。3行目と4行目とは本文内容が連続せず、3行目本文の背後に本来4行目の直前に連続していたと思しい本文「をいひのかるおりて」のうち、「をいひの」「お」「て」の文字の痕跡が視認できる。もと二葉別々の断簡が継がれている。

・4ゝ5 ひさしう「断」「大」「三」―ひさしく「肖」

断簡B 『思文閣墨蹟資料目録 古筆特集号』第三一五号（思文閣・思文閣美術、一九九八年九月）（七二七頁・一行目ゝ五行目）

縦一六・〇糰×横一二・〇糰。本文七行書き。一行あたりの文字数、平均一八・一字。極札なし。料紙、楮紙か。

けはひにをひえておとゝ色もなく成ぬむす	1
めたちはさはいへと心つよくわらひてこの	2
人のさまことにものし給をひきたかへ	3
侍らはつらくおもはれんを猶ほけゝ	4

しき人の神かけて聞えひかめ給ふなめり  
やととききかすおいさり／＼とうなつきて  
おかしき御くちかななにかしらゐ中ひたり

5  
6  
7

・ 1～2 むすめたちは「断」「三」「肖」—むすめたち「大」

・ 4 侍らはつらく「断」—「青表紙本」いつらは「大」、はへらは「横」「池」、はへらは<sup>つらや</sup>。「三」、はつらく「肖」

【河内本】つらく「河」【別本】かつはつらくも「陽」

・ 7 御くち「断」—御くちつき「大」「三」「肖」

# 断簡C 大垣博氏所蔵〈七三二頁・七行目～二行目〉

縦一六・〇糎×横一一・九糎。本文七行書き。字高、平均一二・八糎。一行あたりの文字数、平均一九・四字。極札表「轉法輪殿公敦公いっゝひかせ（『夢山』・黒方印）」。極札裏「いつゝひかせて切 辰八（『榮』・黒楕円印）」。鑑定家、古

筆本家二代了榮（一六〇七—一六七八）。辰八＝寛文四年（一六六四）八月、了榮、五七歳の時か<sup>5</sup>。料紙、楮紙。（図版2）

いつゝひかせていみしく忍びやつしたれ共き  
よけなる男共なともありほうしはせめて爰  
にやとさまほしくしてかしらかきありくい  
とおしけれと又やとりかへむもさまあし

1  
2  
3  
4

くわつらはしければ人々はおくにいりかほにかく  
しなとしてかたへはかたつかたによりぬせし  
やうなとへたて、おはしますこのくる人も

5 6 7

- ・ 1 やつしたれ共「断」「三」―やつしたれと「大」「肖」
- ・ 2 なども「断」「三」―なと「大」「肖」
- ・ 5 かほに「断」―ほかに「大」「三」「肖」
- ・ 7 へたて、「断」―ひきへたて、「大」「三」「肖」

断簡D 早稲田大学図書館蔵（七四一頁・三行目〜七行目）

縦一六・〇糎×横一三・二糎。本文七行書き。字高、平均一二・七糎。一行あたりの文字数、平均一七・八字。極札表「轉法輪殿公敦公つ、けられ（琴山・黒方印）。極札裏「つ、けられて切 丑八（「榮」・黒楕円印）。鑑定家、古筆本家二代了榮（一六〇七―一六七八）。丑八＝寛文元年（一六六二）八月、了榮、五四歳の時<sup>6</sup>か。断簡裏左上部「轉法輪殿公敦公」（□は、剥がし痕）。料紙、楮紙。（図版3）

つ、けられて人なみ／＼ならん事もあり  
かたき事と思ひしつめみつるをこの人の  
物語のついでにちゝおとゝの御ありさま

1 2 3

はら／＼のなににとも有ましき御事も	4
みな物めかしなしたて給をきけはかゝる	5
した草たのもしくはおほしなりぬるい	6
つとてもかたみにやとる所もとひかはして	7

※6行目「は(字母「者」)」に見せ消ち符号があり、「そ」傍書。

- ・1 人なみく「断」「大」「三」—なみく「肖」
- ・2 思ひしつめみつるを「断」—おもひしつみつるを「大」「肖」、おもひしつめつるを「三」
- ・4 なににとも「断」—なにとも「大」「肖」、なに<sup>にイ</sup>とも「三」
- ・6 たのもしくは「断」—たのもしくそ「諸本」

断簡E 『京王百貨店新宿店新春蔵開き第2回古書市出品目録抄』へ七四九頁・九行目く一三行目

縦一五・六糧×横一二・〇糧。本文七行書き。一行あたりの文字数、平均二〇・二字。極札表「轉法輪殿公敦公へき入は心ことに(琴山)・黒方印」。鑑定家、古筆本家二代了栄(一六〇七—一六七八)。料紙、楮紙か。

へき人は心ことにこそとわらひ給てひさし	1
なるおましにつる給て火こそいとけさうひたる	2
心ちすれおやのかほはゆかしき物とこそきけ	3

伝三条公敦筆源氏物語断簡考

さもおほさぬかとき丁すこしをしやり給	4
わりなくはつかしければそはみておはするやう	5
たいなといとめやすくて今すこしひかり見せむ	6
やあまり心にくしやとの給へは右近か、けて	7

※2行目、「つゐ」に、「い」傍書。

- ・ 2 つゐ給て「断」——つゐ給て「大」「三」「肖」
- ・ 6 めやすくて「断」「三」——めやすくみゆれはうれしくて「大」「肖」
- ・ 7 心にくしや「断」「三」——心にくし「大」「肖」

断簡F 大垣博氏所蔵（右、七五一頁・七行目／左、七五六頁・一〇行目／二行目）

縦一五・五糎×横八・五糎。本文、右面に二行、中央部に綴じ目の空白があり、左面に二行。字高、平均一二・八糎。一行あたりの文字数は、右面二行が平均二〇・〇字、左面二行が平均二一・〇字。一行目、和歌一字下げ。極札表「轉法輪殿公敦公こひわたる（「養心」・朱方印）。鑑定家、神田家。料紙、楮紙。（図版4）

こひわたる身はそれなれと玉かつらいかなる筋	1
をたつねきつらん哀とやかてひとりこち給	2

（約三糎分空白）



からぬ事也何事もいとつきなからんはくちおし  
からむたゝ心の筋をたゝよはしからすもてしつ

3  
4

・「断」と、「大」「三」「肖」との間に顕著な異同なし。

断簡 G 久曾神昇編『源氏物語断簡集成』（汲古書院、二〇〇〇年三月）へ右、七五二頁・四行目く五行目／左、七五五頁・一二行目く一三行目

縦一六・〇糎×横一一・五糎。本文、右面に三行、中央部に綴じ目の空白部があり、左面に三行。一行あたりの文字数は、右面三行が平均一九・三字、左面三行が平均二〇・三字。極札表「轉法輪殿公敦公そのなる（「琴山」・黒方印）。鑑定家、古筆本家六代了音（一六七四—一七二五）か。料紙、楮紙か。

そうなるは事もおこたりぬへしとてこなたの  
けいし共さためあるへき事共をきてさせ給ふ  
豊後のすけもなりぬ年ころゐ中ひしつみ

（約三糎分空白）

ぬみもしそかし昔のけそうのおかしきいとみ  
にはあた人といふいつもしをやすめところにう  
ちをきてことのはのつゝきたよりある心ちす

1  
2  
3  
4  
5  
6

・「断」と、「大」「三」「肖」との間に顕著な異同なし。

断簡H 早稲田大学図書館蔵（右、七五五頁・一〇行目〜一二行目／左、七五二頁・五行目〜七行目）

縦一六・〇糎×横一一・二糎。本文、右面に三行、中央部に綴じ目の空白部があり、左面に三行。字高、右面が平均一二・八糎、左面が平均一二・九糎。一行あたりの文字数は、右面三行が平均二〇・六字、左面三行が平均二一・三字。極札なし。断簡裏右上部に「本ト<sup>マ</sup>久我道前」、左上部に「公親<sup>敦</sup>」（「親」に見せ消ち、「敦」と訂正されている）と墨書、左下部に井狩源右衛門の極印（黒方印）。料紙、楮紙。（図版5）

たることのはにゆるき給はぬこそねたき事は  
はたあれ人のなかなることをおりふしおまへなどの  
わざとある哥よみの中にてはまとあはなれ

（約三糎分空白）

たりし心ちに俄に名残なくいかてかかりにても  
立出みるへきよすかなく覚えしおほとの、うち  
を朝夕に出入ならし人をしたかへことおこなふ身

1  
2  
3  
4  
5  
6

・4 心ちに「断」「大」「三」―心ち「肖」

・4 名残なく「断」「三」―なこりもなく「大」「肖」

断簡― 徳川黎明会編『徳川黎明会叢書 古筆手鑑篇三 藁叢・桃江・文車』（思文閣出版、一九八六年八月）所収、古筆手鑑「桃江」〈七五三頁・一〇行目〜一四行目〉

縦一五・九糧×横一二・二糧。本文七行書き。一行あたりの文字数は、平均二〇・〇字。極札表「轉法輪殿公敦公ひておはす（『琴山』・黒方印）」。鑑定家、古筆本家二代了栄（二六〇七―一六七八）。料紙、楮紙か。

ひておはすこうはいのいともんうきたるゑひそ	1
めの御こうちきいまやう色のいとすぐれたる	2
とかの御れうさくらのほそなかにつや、かな	3
るかいねりととりそへては姫君の御れう也あさ	4
はなたのかいふのをり物をりさまなまめき	5
たれとにほひやかならぬにいとこきかいねり	6
くして夏の御かたにくもりなくあかきに山吹	7

・3 と「断」―とは「大」「三」「肖」

【若菜下巻】

断簡J 早稲田大学図書館 九曜文庫蔵（二二八頁・一〇行目〜二二九頁・三行目）

縦一五・五糧×横一八・〇糧。本文一〇行書き。字高、平均一三・一糧。一行あたりの文字数は、平均二一・五字。ただし、5行目の和歌は、字高と一行当たりの平均文字数の算出に含めていない。5行目、和歌一字下げ。極札表「轉法輪殿公敦公（琴山・黒方印）」。鑑定家は、極札表に本文冒頭数文字の書き出しがなく、極札裏に記載事項がないこと、及び筆蹟より判断すると、古筆本家初代了佐（二五七二〜一六六二）。料紙、楮紙。汚れ・虫損あり。（図版6）

つはれより臥むつる、をまめやかにうつくしと	1
おもふいといたくなかめてはしちかくより臥給	2
へるにきてねうくといと <sup>ら</sup> うたけになければか	3
きなて、うたてもす、むるかなとほ、ゑまる	4
戀わふる人のかたみと <sup>手</sup> ならせはなれよなにと	5
て啼ねなるらん是も昔の契りにやとかほをみつ、	6
の給へはいよくらうたけになくをふところにい	7
れて詠み給へりこたちなとはあやしく俄なるねこ	8
の時めくかなかやうなる物みいれ給はぬ御心にと	9
とかめけり宮よりめすにもまいらせす取こめて	10

※□…虫損。

・4 す、むる「断」―す、む「大」「三」「証」「肖」、す、む<sup>ル</sup>「明」

断簡K 『善光寺本坊 大勧進寶物集』刊行会『善光寺本坊 大勧進寶物集』（郷土出版社、一九九九年四月）。へ一一四六頁・四行目〜九行目

縦一五・一糎×横一二・七糎。本文七行書き。字高、平均一三・三糎。一行あたりの文字数、平均二一・〇字。極札表「轉法輪殿公敦公有<sup>有かたき</sup>」（「幽碩」・黒方印）。鑑定家、古筆本家二代了栄の門人である末田幽碩（生没年未詳）。料紙、楮紙。貼り交ぜ屏風にて所蔵されている。（図版7）

有かたき御いとまを只しはしと聞え給てまか	1
て給へりみこ二所おはするを又もけしきはみ給て	2
いつ月はかりにぞ成給へれは神わざなとにこと	3
つけておはします成けり十一月過してまいり	4
給へき御せうそこうちしきりあれとかゝるつゐ	5
てにかくよなくの御あそびをうら山しくなと	6
てわれにつたへ給はさりけんとてつらく思ひ聞え	7

・4 十一月「断」「大」「証」―【青表紙本】十一日「三」「明」、十一日（月イ）「肖」

【河内本】しはすなりけり十一日【諸本】

- ・ 4 過して「断」―すくしては「大」【三】「明」【証】「肖」
- ・ 6 かく「断」―かくおもしろき「大」【三】「明」【証】「肖」
- ・ 6 よなく「断」【証】「肖」―よるく「大」【三】「明」
- ・ 7 とて「断」―と「大」【三】「明」【証】「肖」

## 二 本文

本文の検討について先に結論から述べると、当該断簡の本文のうち玉鬘巻断簡は、現存伝本のなかでも日本大学蔵三条西家本に、一方、若菜下巻断簡は、宮内庁書陵部蔵三条西家証本に、それぞれ大局的に近い本文を有する。以下、具体的に本文の分析を行う。

断簡A（玉鬘巻）の4～5行目「ひさしう」は、「大」【三】と同じであり、「肖」では「ひさしく」とある。その他、青表紙本諸本の間に大きな異同はみられない。

断簡B（玉鬘巻）の1～2行目「むすめたちは」は、「三」【肖】と同じであり、「大」は「むすめたち」とある。3～4行目「侍らはつらく」は、「三」では、「はへらは」の直後に補入記号があり、異文注記として「つらくイ」が傍書されており、「大」は、「いつらは」とある。七行目「御くち」は、「大」【三】【肖】では「御くちつき」とある。断簡本文では、「御くちつき」の「つき」が誤脱したか。

断簡C（玉鬘巻）の1行目「やつしたれ共」は、「三」と同じであり、「大」【肖】では「やつしたれ」とある。2行目「なとも」は、「三」と同じであり、「大」では「なと」とある。5行目「かほに」は、「大」【三】【肖】では、「は

かに」とある。断簡本文は、本来「ほかに」とあるべき箇所を「かほに」と本文転訛したか。7行目「へたて、」は、「大」「三」「肖」のいずれも「ひきへたて、」とある。

断簡D（玉鬘卷）の2行目「思ひしつめみつるを」は、「三」では「おもひしつめつるを」とあり、「大」では「もひしつみつるを」とある。4行目「なににとも」は、「三」では、「なにとも」に異文注記として「にイ」と傍書されており、「なににとも」という本文を有する異本（あるいは他本）が示される。「大」「肖」では、「なにとも」とある。

断簡E（玉鬘卷）の6行目「めやすくて」は、「大」「肖」では、「めやすくみゆれはうれしくて」、それに対して「三」では、「めやすくて」とあり、断簡本文と一致する。7行目「心にくしや」も「三」と同じであり、「大」「肖」では、「心にくし」とある。

断簡F（玉鬘卷）、断簡G（玉鬘卷）は、「大」「三」「肖」との間に顕著な異同はみられない。

断簡H（玉鬘卷）の4行目「名残なく」は、「三」と同じであり、「大」「肖」では、「なこりもなく」とある。

断簡I（玉鬘卷）の3行目「と」は、「大」「三」「肖」では、「とほ」とある。以上までが、玉鬘卷の断簡本文である。次に、若菜下巻の断簡本文を分析する。断簡J（若菜下巻）の4行目「す、むる」は、「大」「三」「証」「肖」では、「す、む」とあるのに対し、「明」では、「す、む」の傍書として「ル」が補入されている。

断簡K（若菜下巻）の4行目「十一月」は、「三」「明」など青表紙本諸本の多くでは、「十一日」とあるが、「大」「証」では断簡本文と同じく「十一月」とあり、「肖」では、「十一日」に「月イ」と異文注記がみられる。河内本の多くの諸本では、「しはすなりけり十一日」とある。ここでの「十一月」や「十一日」の記述は、十二月一日に催される神今食（じんごじき）という天照大神を祭る神事を示している。4行目「過して」は、諸本は「すくしては」とある。6行目「かく」は、青表紙本諸本「かくおもしろき」とあり、断簡本文は「おもしろき」が脱落している。6行目「よなく」は、

青表紙本の多く「よるく」だが、「証」「肖」などは、「よなく」とあり、断簡本文と一致する。「証」の影印では、「な」と「る」との字形が近似しているが、「よるく」の本文と、「よなく」の本文とを有する伝本がそれぞれ存することから、単純に本文の転訛とは判断できない。また、7行目「とて」は、諸本「と」とある。断簡J本文は、4行目「十一月」、6行目「夜なく」が、「証」と一致することから、他の断簡本文のように「三」に近い本文を持つとは言い難い。上記二箇所の特徴的な異同から判断すると、若菜下巻断簡Jの本文は、現存伝本の中でも「証」の本文に近い。

分析の結果、当該断簡のうち玉鬘巻断簡本文は、大局的には日本大学蔵三条西家本に近い本文であり、とりわけ断簡B・Dにて先述したごとく、日本大学蔵三条西家本にみられた異文注記を本文として有する伝本に近いものであると判断できる。ただし、先に確認した日本大学蔵三条西家本の異文注記を本文に有する現存伝本は、確認できていない。一方、若菜下巻では、断簡Jの校異の情報に限られているものの、断簡Kの異同に関しては、断簡本文「十一月」、「よなく」等の伝本間での異同を鑑みると、宮内庁書陵部蔵三条西家証本に相対的に近い本文と判断できる。若菜下巻断簡は、玉鬘巻断簡の場合とは異なり、日本大学蔵三条西家本文との異同もやや顕著である。

いずれにしても当該断簡は、玉鬘巻と若菜下巻との二巻のみの確認にとどまり、全体的な本文の性格について概括的に言及することはできないが、現存伝本の校異を鑑みると、少なくとも断簡本文は巻毎に若干異なる性格を有する可能性は指摘しうる。

### 三 筆 蹟

本節では、当該断簡と、公敦筆とされる写本や短冊の筆蹟・書体等を比較することで断簡が公敦の真筆として認定



可能か否かを検証する。

慶應義塾大学斯道文庫に三条公敦筆『僻案抄』（請求番号九一―ト三七―一）が所蔵されている。本写本は、文明二年（一四七〇）の書写奥書と、文明一二年（一四八〇）の校合奥書を有し、公敦の花押をも有するので、公敦の筆蹟の第一次資料となりうる（図版8）。前者の奥書は、公敦が都に在る時に書写されたものであり、後者は周防国にて書写されたものである。公敦は、『公卿補任』や『実隆公記』の記事によると、文明一一年（一四七九）四月に周防国に下り、それ以後、大内政弘との文化的交流が顕著となるが、明応四年（一四九五）の政弘没後、公敦の活動の記事がみられなくなる。公敦の和歌実績をはじめとする文学との関わりや、大内政弘等との人物交流については、本稿では紙幅の都合上、取り上げることができないため、改めて稿を用意したい。

最初に、公敦筆『僻案抄』（図版9）と公敦筆短冊（図版10）との筆蹟を確認したい。具体的に数文字取り上げて両者の筆蹟を比較してみると、字体や書き癖に共通点が見出せる。

・図版9 『僻案抄』上から「春」（3行目）、「や」（3行目）、「は」（者）（7行目）「ふ（婦）」（11行目）

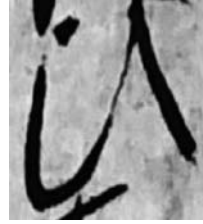




このように公敦筆短冊と『僻案抄』との筆蹟は、同筆と判断できる。尚、上記の短冊以外の公敦筆短冊を幾葉か確認したところ、これらも同様の判断ができそうである。<sup>(9)</sup>したがって、公敦の筆蹟を考える上で、これら典籍にみられる筆蹟が第一の基準となりうる。

では、次に当該断簡と公敦筆『僻案抄』との特徴的な字を具体的に取り上げ、筆蹟を比較検討してみたい。例えば、「ひ」の字の場合。『僻案抄』では、転折部から上方に向かって線質が細くなっていき、再度下方に向かう際、線質は太くなる。また『僻案抄』の「ひ」の字の多くは、下の字との連綿はあまり意識されず、一度筆を離している点も特徴である。一方、断簡では、起筆の線質は太く、左斜め下方にやや筆を向けた後、下方に連綿する。転折部から上方に向かうが線質の太さは一定している。収筆で連綿を意識してか、左下方に向け連綿する。

・図版9 (『僻案抄』・2行目)



・図版2 (断簡C・1行目)



・図版7 (断簡K・6行目)



次に「也」の字の場合。『僻案抄』では、収筆に向かう際、右方にやや伸ばす傾向がある。一方、断簡では、収筆の際、右上に筆を上げる特徴があり、それぞれ運筆方法に差異がみられる。尚、本稿に図版は掲載していないが、断簡I・4行目の「也」も同様の特徴を有する。

・図版9 (『僻案抄』・4行目)



・図版4 (断簡F・3行目)



次に「て」の字の場合。『僻案抄』では、やや右斜め上方に上がり、下方部にて横に伸ばしており、角張った字形になっている。一方、断簡では、『僻案抄』と比しても、右斜め上方には上がらず、字形も細い特徴がみられる。両者は、字形の差異が顕著である。

・図版9 『僻案抄』・2行目



・図版3 (断簡D・7行目)



・図版7 (断簡K・7行目)



最後に「らん」の場合。『僻案抄』では、全体的として字形に角張った特徴を見出せるが、「ら」の転折部もそうである。「ん」は、下部から上方に戻り、収筆へと向かう。一方、断簡では、緩やかな連綿体となり、「ん」の字の場合も、下部から上方には大きく戻らず、収筆へと向かう。その他、断簡Fの2、3行目の「らん」も同様の特徴と認められそうである。

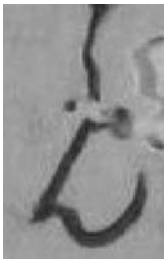
・図版9 『僻案抄』・11行目



・図版3 (断簡D・1行目)



・図版6 (断簡J・6行目)



当該断簡の筆蹟は、既に取り上げた字以外も含め、一文字の字形や、連綿による字形の繋がり、線質等を勘案すると、『僻案抄』と短冊の筆蹟と同筆であるとは言い難い。当該断簡は、悉く伝称筆者を公敦と極められているが、他の公敦筆の典籍における筆蹟を鑑みると、これらと当該断簡が同筆とは言えそうにない。ただし、当該断簡が公敦の真筆でなくとも、公敦監督書写など様々な可能性も想定できるが、現状では推測の域を出ない。

#### 四 書誌の検討

本節では、当該断簡の書誌について検討する。まずは、当該断簡の寸法について言及する。当該断簡の縦の長さは、玉鬘巻の場合、断簡B・C・D・G・H・Iが縦約一六糎、断簡A・E・Fが縦約一五・五糎である。若菜下巻の場合、断簡Jが縦一五・五糎、断簡Kが縦一五・一糎である。縦の寸法が微妙に異なるが、実際に調査を行った断簡の字高と一行あたりの平均文字数とを勘案すると、玉鬘巻では断簡A・C・D・F・H、若菜下巻では断簡J・Kが、それぞれツレであることは認定できる。

本稿に取り上げた当該断簡は、二行×二行、三行×三行、五行、七行、一〇行書きの本文をそれぞれに有する。結論から述べると、裁断前の断簡の書形は、横の長さが一八・〇糎の一〇行書きの本文を有する断簡Jが、本来の一紙二丁四面のうちの一面であると思われる。多数を占める七行書き本文の断簡の横の長さは平均一二糎であり、これを一行あたりの長さに換算すると約一・七糎である。この平均値一・七糎を一〇行分相当に概算すると約一七糎となり、この概算値や断簡Jの横の長さを勘案すると、裁断前の一紙半面は、平均一七糎から一八糎であることが想定できる。さらに断簡Fと断簡Hとの折り目の空白部が約三糎であることから、裁断前の一紙二丁あたりの横の長さは、約三七糎から三九糎前後と想定できる。

次に料紙は、調査結果を踏まえると全体としては楮紙であり、一部打紙されている<sup>⑩</sup>。佐々木孝浩が、「綴葉装は紙の両面を用いるのが原則であるので、裏面まで墨が滲むことのない、繊維が極めて短く堅い「斐紙」か、あるいは繊維が長く柔らかい「楮紙」を徹底的に叩いて密度を濃くした「打紙」を用いて製作することになる」と説いたことも参考になる<sup>⑪</sup>。

次に当該断簡の元の装訂について分析を試みる。集成した当該断簡の内容の順序は、玉鬘巻が、断簡A↓断簡B↓断簡C↓断簡D↓断簡E↓断簡F（右三行）↓断簡G（右三行）↓断簡H（左三行）↓断簡I↓断簡J↓断簡Kである。断簡F・G（左三行）↓断簡F（左二行）であり、若菜下巻が、断簡J↓断簡Kである。

断簡F・G・Hには、中央に約三糎の空白部がある。裁断される前には左右両端にそれぞれ本文が付随していたと思われる。しかし、これら断簡の右面と左面との本文内容は連続しない。断簡F・Gは、右面に前半内容、左面に後半内容がそれぞれ存するのに対して、断簡Hは、右面に後半内容、左面に前半内容が存する。一見、不可解にみえる断簡の空白部と内容の不連続・飛躍とではあるが、実はこれにより断簡の元の装訂が明らかになる。結論から述べると、断簡中央の空白部は、料紙の折り目に相当し、この料紙の折り目と左右面の本文内容の不連続とによって、元の装訂が列帖装と判断できるのである。列帖装とは、数枚の料紙を重ね合わせて、縦に半折りした一括を、数括重ねて、表裏に表紙を付し、各折の折り目に綴じ穴をあけ、糸で綴じた装訂のことである。仮に右面と左面との内容が連続していた場合、料紙の文字面を外に半折りして重ねていく袋綴の一丁、あるいは、列帖装における重ね合わせた一番上の料紙の表面の可能性が想定できる。だが、当該断簡の場合、右面と左面との内容がすべて連続していないため、列帖装以外の装訂は考えられない。その理由について、順を追って具体的に説明していく。

まず断簡Gと断簡Hとは、本文内容が直接繋がり連続している。具体的には、断簡G右面三行が断簡Hの左面三行

に繋がり、断簡Hの右面三行が断簡Gの左面三行へと直接繋がる。断簡本文がどのように連続しているのかを略解すると以下ようになる。枠内に断簡本文を示し、矢印によって内容の順序を示した。

【断簡G】

そうなるは事もおこたりぬへしとてこなたの  
けいし共さためあるへき事共をきてさせ給ふ  
豊後のすけもなりぬ年ころぬ中ひしつみ

ぬみもしそかし昔のけさうのおかしきいとみ  
にはあた人といふいつもしをやすめところ  
にう  
ちをきてことのはのつくきたよりある心ちす

【断簡H】

たることのはにゆるき給はぬこそねたき事は  
はたあれ人のなかなることをおりふしおまへなどの  
はさとある哥よみの中にてはまとゐはなれ

たりし心に俄に名残なくいかてかかりにても  
立出るへきよすかなく覚えしおほとものうち  
を朝夕に出入ならし人をしたかへことおこなふ身

さらに、連続する断簡Gと断簡Hとの本文を整理すると以下になる。「Z」を境として、それぞれの断簡本文を示している。

・断簡G（右）↓断簡H（左）

そうなるは事もおこたりぬへしとてこなたのけいし共さためあるへき事共をきてさせ給ふ豊後のすけもなりぬ年  
ころぬ中ひしつみ／たりし心に俄に名残なくいかてかかりにても立出るへきよすかなく覚えしおほともの、  
ちを朝夕に出入ならし人をしたかへことおこなふ身（『源氏物語大成』七五二頁・四行目―七行目に相当。）

・断簡H（右）↓断簡G（左）

たることのはにゆるき給はぬこそねたき事ははたあれ人のなかななることをおりふしおまへなどのはさとある哥よみの中にてはまとおはなれ／ぬみもしそかし昔のけさうのおかしきいとみにはあた人といふいつもしをやすめところのうちをきてことのはのつゝきたよりある心ちす（『源氏物語大成』七五五頁・一〇行目―一三行目に相当。）

文字面においては、それぞれの断簡本文の繋がりは明瞭である。

それでは裁断前の列帖装の括における両葉の位置関係はどのようになっていたのだろうか。列帖装は、料紙の表裏両面に書写されるため、裁断の際、間剥ぎ（一紙表裏の間を剥いで分離すること。一枚が二枚になる）をして、裏打ち（剥いだ料紙の裏面に薄い和紙等を貼り合わせて補強すること）すること、分離した表裏それぞれの料紙は補修される。本稿に集成した断簡も、この補修過程を経たものであろう。断簡Gと断簡Hとの位置関係は、重ね合わされた料紙のうち、下に位置する料紙が断簡Gであり、その上に重なる料紙が断簡Hである。つまり、断簡Gの表面と断簡Hの裏面とが直接接することになる。列帖装は、重ね合わせた数枚の料紙を縦に半折りして、冊子状にするため、下に位置する料紙の表面右側の内容が、上に重ねられた料紙の裏面左側の内容に繋がっていくことになる。

このような料紙同士の関係性により、折り目を有する断簡Fと断簡Gとは、内容が右側から左側への順序に則るため料紙の表面となり、対して断簡Hは、内容が左側から右側への順序となるため、料紙の裏面であると判断できる。

加えて断簡Fについても言及する。断簡Fの左面の本文は、玉鬘巻の内容の最終部に相当する。前述した列帖装の構成上、断簡Fは料紙の表面となり、さらに左面が玉鬘巻の最終部に相当していることから、一括あたりの内容量と料紙の枚数とを、ある程度想定することも可能となる。もちろん、この想定の前提において、確認しうる断簡本文は、あくまで玉鬘巻全体のごく一部であり、また、本文についても異同の多寡によっては分量に微差が生じうることなど、



基本的な問題が付き纏う。

そのうえで試みに左面二行の本文に後続する本文を、第二節で確認した現存伝本の中で相対的に断簡本文に近い日本大学蔵三条西家本文を用い、後続していた本文の分量を想定してみたい。

日本大学蔵三条西家本（※太字は、断簡本文。便宜的に、行末に通し番号を付した。）

からぬ事也何事もいつきなからんはくちおし	1
からむた、心の筋をた、よはしからすもてしつ	2
めをきてなたらかならむのみなんめやすかるへ	3
かりけるなどのたまひてかへりことはおほしも	4
かけねはかへしやりてんとあめるにこれよりを	5
しかへしたまはさらむはひか／＼しからむとそ	6
ゝのかしきこえたまふなさけすてぬ御心にてか	7
きたまふいとところやすけなり	8

かへさむといふにつけてもかたしきのよるの	9
ころもをおもひこそやれことはりやとそあめる	10

断簡Fの本文に後続する日本大学蔵三条西家本文の総文字数は一六〇文字であり、断簡の一行あたりの平均文字数が約二二字とすると、七行から八行相当の本文が付随することになる。また、参考までに大島本本文で概算すると、後続する本文の総文字数は一四七文字であり、約七行分後続する計算となる。以上の分析により、断簡F左面二行が玉鬘巻の最終丁表であるとする、一括（二帖）あたり四～五枚程度（遊紙が存在していた可能性も含める）の料紙が重

ね合わされていたと想定できる。

最後に裁断・補修方法について言及する。断簡B・D・Iでは、右端の裁断部と書写された文字とが近接しており、断簡C・E・Kでは、左端の裁断部と文字とが近接している。さらに断簡Iの左端の裁断部には、次行の本文の痕跡がみられる。対して断簡Jの両端の余白は、本文の行幅と比しても間隔があり、連続する本文の行間箇所では裁断されたと考え難い。これら断簡における左右端の余白の不均一とは、いかなる理由により生じたのだろうか。

その解を出すための手がかりとなりうるのが、断簡Aである。断簡Aは、3行目と4行目との間に料紙を継いだ痕があり、3行目と4行目とは本文内容が連続していない。3行目本文の背後に本来4行目の直前に連続していた本文の文字の痕跡が視認できることから、4～5行目の二行の本文も、元は三行の本文を有していたことがわかる。つまり、三行の本文を有する二葉別々の断簡が、一葉の断簡に仕立てるために継がれたものと思われる。それならば、なぜ4行目に前続していた本文一行分を抹消する必要があったのだろうか。それは、断簡の見映えの問題に起因している。当該断簡の行幅は、概して間隔に余裕があるとはいえない。このことを裏付けるように、前述した本文の行間箇所において裁断された諸断簡は、左右端のうち、いずれか一方に裁断部と文字とが近接しており、両端の余白は必ずしも均一ではない。断簡Aは、もと別々の断簡同士を継いでおり、仮に3行目の本文と4行目の直前に前続していたと思しい本文とをそのまま継いだ場合、おそらく行幅が他の行幅と均一になりえなかったのではなからうか。本文内容の連続性ではなく、見映えを尊重し断簡の均整美を創出するためにこそ、本文を一行分抹消し、断簡同士継ぐことで一枚の断簡に仕立て上げたのである。

## 結

ここまで検討してきた伝公敦筆源氏物語断簡の特性について纏める。当該断簡の元の装訂は、列帖装であり、書形は、寸法より判断するとやや大きめの升形本（六半本）あるいは、横本の可能性を見出せるが、そのいずれかを確言するのは現状では難しい。しかし、いづれにしても料紙の一面を裁断する際、縦長長方形の形態にするため、多くは七行本文の断簡に裁断されたのだろう。一〇行本文の状態では、横長長方形の断簡となり、また八行から九行では正方形に近い形態の断簡となってしまう。本稿に集成した当該断簡に縦長長方形の断簡が際立つのは、正方形よりも縦長長方形の断簡を品格あるものと見なし、断簡としての見映えを高めるといふ裁断の方針によるからである。そのことは、断簡Aにおいて別々の二葉の断簡を継ぎ、あたかも一葉の断簡のごとく仕立てる営為によっても徴証の一つとなるのである。

## 注

- (1) 小林強「源氏物語関係古筆切資料集成稿」(伊井春樹編『本文研究 考証・情報・資料』第六集、和泉書院、二〇〇四年)。  
国文学研究資料館「古筆切所収情報データベース」(<http://basel.nijiac.jp/~kohitu/>)では、断簡G・I・Kの三葉が該当する(二〇一九年十一月現在)。
- (2) 本手鑑は、早稲田大学図書館特別資料室(松本智子)「早稲田大学図書館所蔵 佐佐木忠慧旧蔵資料目録」(『早稲田大学図書館紀要』第六〇号、二〇一三年三月)に書誌情報が簡潔に記載されている。
- (3) 早稲田大学図書館「古典籍総合データベース」(<http://www.wul.waseda.ac.jp/koteneki/>)において画像閲覧可能(二〇一九年十一月現在)。「源氏物語若菜下切」(請求番号文庫三〇一E三七六)。

(4) 池田亀鑑編著『源氏物語大成 巻二 校異篇』（中央公論社、一九五三年）、加藤洋介編『河内本源氏物語校異集成』（風間書房、二〇〇一年）、加藤洋介「源氏物語校異集成（稿）」（<http://www.letosaka-u.ac.jp/~ykato/index.php/view/14>、二〇一九年一月現在）、源氏物語別本集成刊行会編『源氏物語別本集成』第6巻・第8巻（おうふう、一九九三年・一九九六年）。

(5) 村上翠亭ほか『古筆鑑定必携 古筆切と極札』（淡交社、二〇〇四年）、森繁夫『古筆鑑定と極印』（雅俗山荘、一九四三年）、中村健太郎「古筆了栄の極札にみられる「琴山」印の経年変化と発行年次の特定について」（『書道学論集』一、二〇〇三年）、同「極札における記載形式の時代的変遷について―古筆本家を中心として―」（『若木書法』三、二〇〇四年）、同「古筆別家の鑑定活動について」（『若木書法』四、二〇〇五年）等、参照。

古筆了栄の極札のうち、年次特定が難しい場合が存する。すなわち、極札裏面の鑑定年次が十二支によって記載されているものは、十二年周期で候補となる時期があり、特定が難しい。

こうした鑑定時期の特定が難しい了栄の極札について、前掲、中村健太郎（二〇〇三）は、表面に捺印された「琴山」印の欠画の変遷過程と極札の記載形式とを手がかりに鑑定時期の特定を試みた。中村は、極札表面に捺印された「琴山」印の欠画の変遷過程を四期に区別した。とりわけ三期は、「琴山」印外郭左上部の欠画を特徴とし、判断の目安となる。本稿に取り上げた断簡C・Dは、「琴山」印が「欠損なし」の一期から「第一欠損」の二期におけるものと判断した。また中村は、極札の記載形式について、表面の本文冒頭数文字の書き出しの有無と、裏面の十二支、あるいは千支の記載をもとに鑑定時期を三期に分類した。断簡C・Dは、両葉ともに表面の書き出しがあり、裏面に十二支が記載されていることから、中村の指摘する二期に相当する。

そして中村は、これら極印と極札の記載形式との考証を念頭に置き、最終的に「第I類」から「第VI類」の鑑定時期の分類を導き出した。これに従い、断簡C・Dの鑑定時期が、中村の分類基準のうち万治三年（一六六〇）七月の例を確認する「第II期」に近い了栄の極めであると判断した。

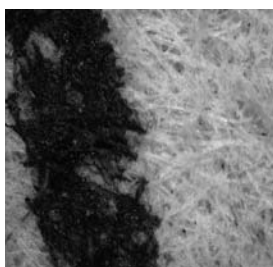
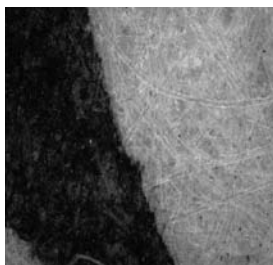
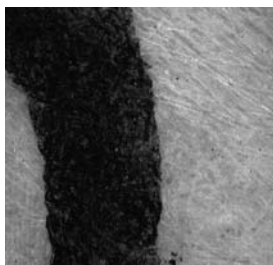
(6) 注(5)、『古筆鑑定必携 古筆切と極札』（一一三頁）に寛文元年（一六六一）四月、了栄の極札がある。

(7) 山岸徳平・今井源衛監修、石田穰二「宮内庁書陵部蔵 青表紙本 源氏物語 若菜下」（新典社、一九六九年）、六八頁八行目「十一月」、六九頁一行目「よなく」。

(8) 三条公敦の活動については、米原正義「大内政弘と三条公敦」(『戦国武士と文芸の研究』桜楓社、一九七六年。礎稿は「中世における地方武士と下向公家の文化交渉―大内正弘と三条公敦」)、『國學院雜誌』第六二卷、一九六一年四月)、井上宗雄『中世歌壇史の研究 室町前期 改訂新版』(風間書房、一九八四年)等に詳しい。

(9) 日本古典文学会編『日本古典文学影印叢刊16 短冊手鑑』(貴重本刊行会、一九七八年)五四、小松茂美編『日本書蹟大鑑 第八卷』(講談社、一九八〇年)一〇七・一〇八、冷泉家時雨亭文庫編『冷泉家時雨亭叢書 短冊手鑑』(第九七卷、朝日新聞出版、二〇一七年)四六、等。また、短冊以外に伝称筆者を三条公敦とする断簡は、以下の文献においても確認できる。『古筆手鑑大成 第三卷 文彩帖(根津美術館蔵)』(角川書店、一九八四年)表一四丁オ「夫木抄切」、徳川黎明会叢書 古筆手鑑 篇一 玉海・尾陽(同朋舎、一九九〇年)七六「歌書切」、橋本不美男・久保木哲夫編『細川家永青文庫叢刊 別巻 手鑑』(汲古書院、一九九三年)一〇三「古今集注切」等、参照。

(10) 穴倉佐敏編『必携古典籍・古文書料紙事典』(八木書店、二〇一一年)参照。また、USBデジタルマイクロスコープを用いて、紙の繊維を判定した(上図から断簡D・H・J)。



(11) 佐々木孝浩「日本古典書誌学論序説」(『日本古典書誌学論』笠間書院、二〇一六年、一五頁)

(12) 佐々木孝浩は、注(11)前掲書同章において「綴葉装は粘葉装と同様に、長方形(四半)のものと正方形(六半)のものがあり、稀に横長のものも存在している」(二三頁)(傍線は稿者による)と指摘する。尚、本稿では「綴葉装」ではなく、「列帖装」の

語に統一している。

また、断簡の原装について考察するため、源氏物語断簡をはじめとする古筆切の装訂を概観した。以下に参照した文献等を列挙する。国文学研究資料館「古筆切所収情報データベース」(<http://base1.nijiac.jp/~kohitu/>、二〇一九年一月現在)、小松茂美『古筆学大成 第二十三卷 物語・物語注釈一』(講談社、一九九二年)、同『古筆学大成 第二十四卷 物語注釈二・物語・歌論・歌謡』(講談社、一九九三年)、久曾神昇『源氏物語断簡集成』(汲古書院、二〇〇〇年)、同『物語古筆断簡集成』(汲古書院、二〇〇二年)、小林強『源氏物語関係古筆切資料集成稿』(伊井春樹編『本文研究 考証・情報・資料』第六集、和泉書院、二〇〇四年)、藤井隆・田中登『国文学古筆切入門』(和泉書院、一九八五年)、同『続国文学古筆切入門』(和泉書院、一九八九年)、同『続々国文学古筆切入門』(和泉書院、一九九二年)、田中登編『平成新修古筆資料集』第1集・第5集(思文閣出版、二〇〇〇年・二〇一〇年)、同編『古筆の楽しみ』(武蔵野書院、二〇一五年)、同編『続古筆の楽しみ』(武蔵野書院、二〇一七年)、日比野浩信『源氏物語断簡管見』(愛知淑徳大学国語国文 第三四号、二〇一一年)、横井孝『実践女子大学所蔵 源氏物語古筆切目録稿』(一) (三) (実践女子大学文芸資料研究所編『年報』第34号・第35号・第36号、二〇一五年・二〇一六年・二〇一七年)等。これらを概観すると、断簡Jのように横長の形態の断簡は稀観ではあるが、例えば、櫛笥節男『宮内庁書陵部 書庫涉獵―書写と装訂―』(おうふう、二〇〇六年、一〇四頁)に紹介されている宮内庁書陵部蔵『源氏物語』四〇冊(函架番号五五四―一三)は、現装「大和綴の仮綴本」、「縦一七・〇センチ、横二〇・三センチ」、「一面一〇行、一行一七・二〇字、文字高二・六センチ」とされ、当該断簡の特徴に共通している点もあり、参考になる。

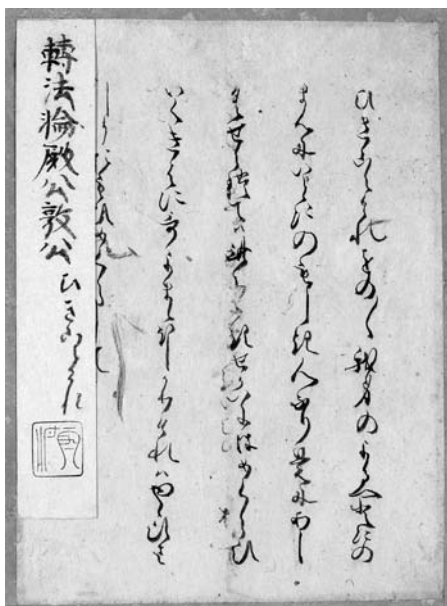
## 〔付記〕

ご所蔵断簡の調査、翻刻、図版掲載のご許可をくださった大垣博氏、善光寺本坊大勧進宝物館、公敦筆『僻案抄』の間覧と図版掲載とのご許可をくださった慶應義塾大学附属研究所斯道文庫長の佐々木孝浩氏、早稲田大学図書館、当初の調査より各所へのご紹介をはじめ様々にご尽力してくださり、またご所蔵短冊の調査、図版掲載のご許可をくださった兼築信行氏、ご教示を賜った久保木秀夫氏をはじめとする関係各位に心より厚く御礼申し上げます。

(たきやま あらし 大学院文学研究科修士課程在学)

【図版1】

・断簡A



【図版2】

・断簡C

極札（裏）



・断簡C



【図版3】

・断簡D 極札（表）



・断簡D 極札（裏）



・断簡D（表）



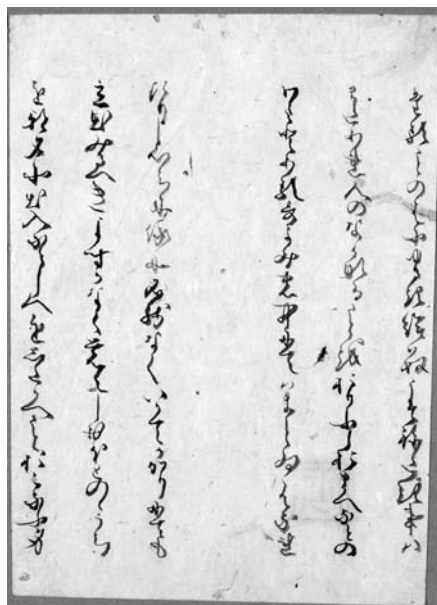
【図版4】

・断簡F





【図版5】  
断簡H



【図版6】  
断簡J



【図版7】

・断簡K



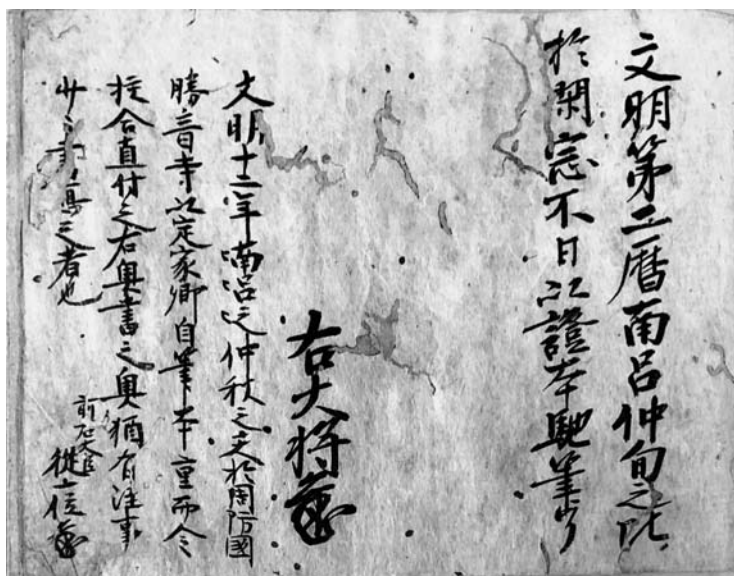
【図版8】

・慶應義塾大学附属研究所

斯道文庫蔵

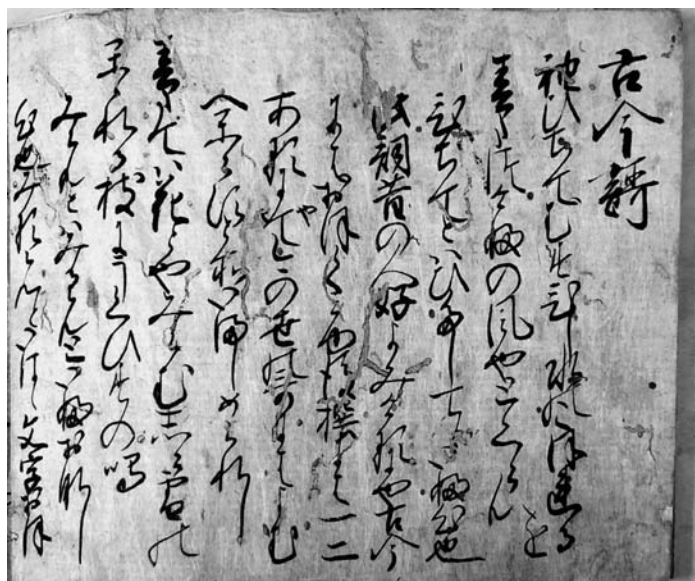
公敦筆

『僻案抄』



【図版9】

・慶應義塾大学附属研究所 斯道文庫蔵 公敦筆『僻案抄』



伝三条公敦筆源氏物語断简考

【図版10】

兼築信行氏蔵 公敦筆短冊

